見えない洪水

ケースD

糸川英夫

未来捜査局

地球は21世紀を迎えられるか

見えない洪水

ケースD

糸川英夫
未来捜査局

見えない洪水ケースD

昭和五十四年十二月二十五日発行

著　者　糸川英夫・未来捜査局
©1979　KIT ENTERPRISE CO., LTD.
発行者　切刀良吉
発行所　株式会社CBS・ソニー出版
郵便番号　一六二
東京都新宿区市ヶ谷田町一―四
電話〇三（二六六）五八七一
振替東京一―六五八二三
印　刷　凸版印刷株式会社
定　価　一二〇〇円
乱丁・落丁本はお取替えします。
0093―10065―3459

見えない洪水ケースD　目次

プロローグ 5
一 疑惑の誕生 10
二 生まれた日 21
三 恋人たちの海 31
四 友と語れば 45
五 ゼミナール 61
六 父の友人達 91
七 母の話 111
八 科学技術庁事務次官 122
九 不思議な女 132

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

十　原情報から　146
十一　暗い顔　214
十二　知っていた人　231
十三　さまざまな事　248
十四　皆月へ　261
十五　闇の力　296
十六　二十年前の真実　314
十七　ケースD　337
十八　見えない洪水　358
エピローグ　376

装幀　油谷勝海

プロローグ

ハンドルを握っている両の掌に汗がしきりに滲んでくる。どうもおかしい。身体のどこか奥深いところで悪寒が次第に大きくなってくる。風邪だろうか……。

大和奎一郎は二四六号線を町田市へ向かいながらバックミラーを覗き込んだ。今日は一日中、どこへ行くにも後をつけられている感じだった。それがなぜかは見当がついている。

だが、そんなことをさほど気にしているわけではなかった。今、彼の関心は世界的スクープをどう公表していくかという点に絞られている。海外特派員としての豊かな経験と、鋭い国際感覚が石油危機の背後にうごめく巨大なものの存在を嗅ぎつけていた。

彼には自信があった。

その背景を確認しようと昨日は松平氏にも会った。その時語った氏の言葉が今もまざまざと耳の底に残っている。

「石油問題は先進国のエネルギー浪費のツケと見ることもできるし、ヨーロッパ流の合理主義とイスラム文化の葛藤とも読める。あるいは南北間の所得や技術移転の新しい契機とか資源節約の象徴とか、いろいろにコメントできるだろうね。

もちろん今後、世界の構造がどう変わっていくかを知るためには、現在の石油危機をどう読むかにかかっている。単に代替エネルギーの問題ではないだろうね」

氏はまたこうも言った。

「エネルギー問題はなんとか片付くだろう。アラブの大義とか、石油資源の温存とかいっても、寄り合い所帯のOPECの横暴を、世界の大国がいつまでも腕を拱いて見ているはずがないからね。むしろ問題は食糧だ」
「南の開発ですね」
「現在、深刻化している南北問題を解決する切札がそれだ。しかし石油に揺さぶられている世界の中で誰が食糧開発まで考えられるか、だね」
「下手をすると地球的な規模で環境汚染が起こりかねませんね」
「さよう、人類が技術の力に物をいわせて自然を使いつくすのが怖い。環境には代替物がないからね」
「しかし食糧増産に取り組まない限り、爆発する人口を養えなくなります」
「そこが辛いところだ。だが、わしはその時にこそ、情報技術の力が試されると思う。情報が開発と環境のバランスを調整していけるかどうかだ」
「情報が、ですか？」
「情報の本質というのは常に未来を占う力を内蔵していることだからね。科学技術のあらゆる知識を情報に投入できれば情報は真価を発揮することになる。これを見誤ると危険なことになるだろうね」
「そうですね。情報がすべて現状肯定の価値観にくっつきすぎるのは怖いと思います。われわれジャーナリストも常に素人の好奇心で専門家に問いかけるべきでしょうね。そのことが情報を新鮮に保つし、専門家の独善を防ぐことにもなりますね」

「世界的な規模で食糧増産をやるとなればこれはとてつもなく巨大技術が必要になるはずだ。その時、情報技術の方もきちんと作動するようにしておかないと大変なことになりかねない。開発技術を監視するのが情報技術の大きな役割となる。情報とはある一面で予測技術でもあるわけだからね」
「ジャイロコンパスですね」
「情報がそれを怠ると、出てくるのは宗教だろう。それもまやかしの予測を振りかざしてね」
「いわゆる世紀末思想というのはみんなその類ですね」
「その意味で核融合炉を作ろうとする試みは意義がある。これは明らかに未来技術だからだ。世界的な農業プロジェクトが動くとすれば、その波及効果は未曾有の大きさになるだろう。それが何かのファクターによって暴走しはじめたときのデュアル・システムとして、核融合炉開発があるべきだろうね」
大和奎一郎は松平氏の言葉を思い返しながらさすがだと思った。彼にとっては人生の先輩として、また理論的指導者としていつ会っても尊敬できる人物なのだった。
その時、不意に彼は心臓を錐で突き刺されたような激痛を覚えた。悪寒が背筋を走り抜け、冷たい汗が吹き出した。
彼は思わず呻いた。
一瞬のうちに眼の前が暗くなり、意識を失ってハンドルに突っ伏した。
「サミト……」
彼が最後に呟いた言葉はそのひと言だった。それは最愛のわが子の名前だった。

コントロールをなくした車はセンター・ラインを越えて暴走した。
一九八〇年七月二日夜のことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

見えない洪水ケースD

（一）疑惑の誕生

「君の父上は殺されたのだ」
老人の静かな声が、エコールームの中を駆けめぐるようにいつまでも心に響いていた。
一九九九年六月二十九日。
大和佐満人（やまとさみと）は二十歳の誕生日を迎えた。

彼自身は誕生日というものにさして意義を認めているわけではなかったし、それほど嬉しいとも思っていなかった。が、母にとってみれば毎年確実に成長していくわが子の姿を確認する喜びがあるのだろうと察して、とりたてて異議を唱えないことにしていた。
しかし、今年の誕生日には、今までと違った嬉しさがひとつだけあった。大人になったのだからという理由で、長谷部カレンとの交際を母が正式に認めてくれたからである。
誕生パーティには、もちろんカレンも招待した。ゼミの学友達とともに、彼女は十九本の白バラに赤いバラを一本だけ入れた花束を持ってきてくれた。
友人達の贈り物はいずれも、ささやかだが心のこもったものばかりだった。
モンゴル人のムンク・トグトホはアルツという酒を持ってきた。彼の説明によれば、原料は馬の乳なのだそうである。
「中国では世の中で一番うまいものを醍醐味（だいごみ）といいます。その醍醐というのは乳を発酵させたも

ののことです。このアルツという酒は、発酵させた馬の乳をさらに醸造したモンゴル独特のものです。だから超醍醐味です」

なるほどアルコール度四十五度という強さにもかかわらず、飲んだ後でほのかに乳の甘味と香りが残る不思議な酒だった。

谷口涼太郎と田丸あかねは木製の球をくれた。野球のボールほどの大きさで、実は組木細工になっている。一度バラバラにして組み直すと、表面に〝サミト〟とモザイク状に文字が現われる仕組みになっている。二人は二週間かけて組み変えのパターンを考えたのだという。

ナイジェリア人のベソロ・シャガリはナイフを一本持参した。それは刃渡り十五センチほどで、柄に蔓の一種がていねいに巻いてある。少年の頃、拾い集めた釘を溶かして自分で作ったのだと彼は説明した。

ピーター・マラフィはT・S・エリオットの詩集をくれた。

〝マーゲートの砂浜でなにもできなかった折れた爪〟

この詩の意味を尋ねて以来の友人であるそのイギリス人は、彼が秘蔵の詩集を贈ってくれた。

高校時代からの友人である内山真吾は五十リッターのガソリン券をくれた。彼の家はもう個人では持っている人も少なくなったガソリン車の、マニア向けレンタル会社を経営しているので、ガソリンの割当てが多いのだ。佐満人のように自家用でガソリン車を持っている場合は一ヵ月に二十リッターしか割当てがなく、しかも営業用の倍近く高い。それだけに、真吾の贈り物は貴重な価値があった。

もっとも、実をいえば明日はカレンと海へ行く計画を佐満人は立てていて、それにしてはやや

ガソリンが心細かったので、真吾に三十リッターほど頼んだのだった。それを五十リッターも持ってきたのは、真吾の方にも近いうちオレにも車を使わせろよな、という含みがあるわけで、いつもながらの交換条件なのだった。

パーティはやなぎ広場で行なわれた。

五十坪はあるこの庭は大和家のファミリー広場の役目を果していた。その周囲には幅二メートルほどのスペースがあり、鶏舎、グリーンハウス、小型太陽熱交換器、微生物発熱器と簡単なバーベキューの設備が置いてある。

その外側には、大和家の大家族を構成する五軒の家が建っている。

中心の庭には大きな柳の木が五本ある。佐満人の曾祖父にあたる人物が陶淵明の詩を好み、その古代中国の詩人が自宅の周囲に柳を植えて五柳先生と呼ばれた故事にちなんだものだそうである。

大和家は、江戸の明暦期に武士を捨て農業を営むようになったという。多摩川の河畔を耕し、野川の水を引いて水田を作ったという。そんな昔のことはわからないにしても、佐満人の子供の頃にも家の周辺にはまだかなり畑があった。その頃まで生きていた曾祖父が頑として農業をやめようとはしなかったからだ。

祖父もまた、それを守った。祖父はT・K大学農学部を出て農政学者となった。自らは畑を耕さなかったものの土には愛情を持つ人だった。その愛情が、昭和四十年から五十年代の地価高騰期にもみだりに土地を売らせなかった。

やがてオイルショックがあり、エネルギー不足の嵐が吹き、野菜の残留農薬や食品添加物の毒性が問題になった時代が到来したときに、自家用の蔬菜類を作る土地があることで大和家がどれだけ救われたか知れない。そのパニック寸前の時期を境に、大和家の近親者は次第に祖父の家を中心に集まってきた。食糧事情もあったが、何よりも家を建てるスペースがそこにはあったからである。

その意味でも、祖父は農政学者として見事に将来を見通していたといえる。祖父は土地をうまく案分して、自家菜園を残しつつ近親者に土地を与えた。その結果が、政府のモデルケースに取り上げられるほど理想的な近隣同居のコミュニティーとなったのである。

佐満人の誕生パーティにはその人達も出席した。

亡父の弟、つまり叔父とその家族。佐満人が純おじと呼んでいるその人は、大和純二郎という。海洋学の専門家で、そのためかどうか春の海のようにゆったりとした人物である。子供が二人いる。上が姉で高校二年生、弟が中学一年生で、一人息子の佐満人にとっては妹と弟のような存在である。

祖父の妹夫婦もコミュニティーの仲間だ。つまり佐満人からすれば大叔父、大叔母にあたる老夫婦で、大叔父は盆栽造りの名人であり、大叔母は生田流の琴の先生である。子供達はもちろん、すでに独立して別に暮しており、老夫婦は趣味がそのままなにがしかの実益を生むという、のびやかな生活を送っている。

三ヵ月前にブラジルから帰ってきた佐満人の姉夫婦もまた〝やなぎコミュニティー〟の一員に

なっている。国連に本部を置く「世界食糧充実計画機構」からの派遣指導員として五年間アマゾン流域の開発に従事していた義兄は三津田正明といい、豪快な笑い声の持主である。彼は祖父の愛弟子でもあり、農林技官として農林省に勤めていた頃、姉と知り合って結婚した。ブラジルへ派遣されたのはその直後だった。五年ぶりに帰国した彼の変化はみんなを驚かせた。もともと上背のある方ではあったが、その身体に重量挙げの選手のような筋肉がつき、真黒に陽焼けして、おまけに顔はカストロひげに覆われていた。

姉もふっくらと肉がついて、すっかり主婦らしくなっていた。しかしこの夫婦にはまだ子供がない。母がそのつもりはないのかと尋ねたとき、三津田は、そんなことはない、毎晩誠心誠意励んでますよと大声で笑い、姉に叱られたが、二人とも、子供が欲しくて仕方がないというのが偽りのない気持らしい。

母もこの日は仕事を休んだ。母はLEM事務局の書記なのである。LEMとは生活創造運動のことで消費者活動から発展してきたものである。省エネルギー時代に極度の節約を強いられた主婦達は、生活を守るという意識から生活は創らなければならない方向へと発想を転換したことが、この運動に大きな力を与えた。従来の告発型から脱却した運動は医療、安全、教育、老後、商品、文化など広い分野でサービスの送り手と受け手、生産者と消費者の間に立ち、コンセンサスをまとめるインター・ソーシャル・コアとなった。

最近ではこのLEMの働きが学問的にもとりあげられていて、ヒューマニゼーションに新しい道をつけるものと高く評価されている。

母も結構忙しいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook